

～紙芝居の選び方と演じ方～

I 紙芝居の選び方

紙芝居の二つの土台

(1) 紙芝居ならではの「特性」が追求されている。

「特性」とは → 作品の世界が現実空間に出て広がり、観客が共感して作品の世界を自分自身のものにしていくということ

(2) 作品の「内容」が生きる意味と喜びを追求し、共感できるメッセージであること。

紙芝居の二つの型

(1) 物語完結型

民話『天人のはごろも』(脚本・堀尾青史 画・丸木俊 16場面)

民話『たべられたやまんば』(脚本・松谷みよ子 画・二俣英五郎 16場面)

民話『にじになったきつね』(脚本・川田百合子 画・藤田勝治 12場面)

民話『いもころがし』(脚本・川崎大治 画・前川かずお 12場面)

民話『あひるのおうさま』(脚本・堀尾青史 画・田島征三 12場面)

物語『ふうちゅんのそり』(脚本・神沢利子 画・梅田俊作 12場面)

物語『やさしいおともだち』(原作・武田雪夫 脚本・画・瀬名恵子 12場面)

創作『ひよこちゃん』(原作・チュコフスキイ 脚本・小林純一 画・二俣英五郎 12場面)

科学・知識『てんとうむしのテム』(脚本・画・得田之久 12場面) 等

(2) 観客参加型

物語『ごきげんのわるいコックさん』(脚本・画・まついのりこ&ひょうしげ 12場面)

共感『ぶたのいつつご』(脚本・画・高橋五山 8場面)

共感『おおきくおおきくおおきくなあれ』(脚本・画・まついのりこ 8場面)

共感『みんなでぱん!』(脚本・画・まついのりこ 8場面)

平和・環境『かりゆしの海』(脚本・画・まついのりこ 写真・横井謙典 8場面) 等

2 紙芝居の演じ方

演じる時に大切なこと

(1) 演者がその作品が語っていることに共感している

(2) その世界を観客と共に楽しんでいる

演じる時に気をつけること

- ① 下読みをして十分に読み込み、順番も確認しておく
- ② 舞台を使うことにより、現実の世界とは別の世界に引き寄せる（舞台があれば使用するほうがぞましい）
- ③ 舞台は、子どもの目の高さより少し上になるよう位置を調節する
- ④ 舞台の下手横に立ち、観客の顔を見ながら演じる
- ⑤ 作家名、画家名、タイトルを読む
- ⑥ 大げさに演じる必要はなく、自然に演じる
- ⑦ 抜き方等のアクションを大切にする
- ⑧ 終わりに「おしまい」を入れ、最後の場面のまま、舞台のドアを閉じる



3 参考文献等

『紙芝居・共感のよろこび』 まついのりこ/童心社

『紙芝居の演じ方 Q&A』 まついのりこ/童心社